

ループリックが結ぶ教育接続(13):
ループリックが結ぶ大学教育の未来

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/43332

ループブリックが結ぶ大学教育の未来

金沢大学 大学教育開発・支援センター准教授

杉森 公一

すべての教師・学生のために

教育と学習の到達度評価による教育改善を図る試みは、現在に始まったことではない。たとえば、行動主義の心理学者スキナーが立てた「プログラム学習」の理論は、スモールステップに刻まれた学習進度を明らかにし、コントロールしながら自学自習を進めていく。教授・学習理論は、教師の教授活動と学習者の学習活動のプロセスの連携に光をあてるものである。

理学療法・作業療法士の教師教育の黎明期である一九七八年に、教育評価に関する有用な議論がなされている。奈良勲からの「教育における評価が公然と行われるだけの意味を持つために、教育における評価はどうあればよいか」「他人によって評価され、その結果を示された人間は、それをどう受け止めていけばよいか」という問いに、教授・学習理論

ろう。ループブリックの概念は、教育の梯子モデルに明確な観点と水準を与え、リメディアール教育などの学習支援、さらには現代社会が直面する教育格差を乗り越えるための視座を提供する。

教育と学習と社会を結ぶループブリックを描く

これまでの本連載では、主に大学での教育改善を意図し、教師と学生の相互の学びを促進する目的のもとに、ループブリックを導入して間もない事例を積極的に取り上げた。新しくループブリックを学ぼうとする教師を援助するための企画だったのだが、各地から送られてくる原稿に感銘を受け、筆者自身が大いに勇気づけられ、ループブリック作成のワークショップ研修の実現に力をいただいた。

教育接続の視点からは、入学前教育と初年次教育(第三、五回)、地域学習とサービ斯拉ーニング(第四、七回)、キャリア教育(第八回)の取り組みでの着実な萌芽が見出された。学生支援(第六回)、教育機関の評価(第一一回)、教師自身の学習(第二二回)など、授業にとどまらない枠組み(入れ子構造)での活用が広がっていることも示された。前掲の一九七八年の問いは色あせず、すべての教育現場の課題に共通して残ってはいるものの、それぞれのループブリックの実践が教師・学生の相互学習のスキルステップを刻んでくれていることが伝わってきた。

また、大学教育の前後には、大学入試選抜と就職活動が置かれているのだが、その入口

「教授フロージャーチャート」の提唱者である沼野一男が答えている。何のために評価をするのかという教育評価の目的によって当然変わってくるはずであり、絶対評価、相対評価の欠点を挙げた上で、到達度評価の可能性を次のように示した。「教授活動において学生を到達させようとする目標を予め明確に設定しておいて、それを基準として学生の到達水準を測定し、評価する」到達度評価は、教授目標を設定する段階で評価の方法を決定しなくてはならず、「教育評価が教授活動全体のなかに組み込まれる」ことに相当する。

学習成果を知識獲得として量的に測る客観テストだけでなく、知識習得以外を含む学習成果を測ることができる現代のループブリックを用いることで、評価そのものを教師・学生相互の学びとし、教授・学習を振り返る術を持つことができるのである。

と出口の様子は、最近大きな変化の兆しを見せている。教育再生実行会議の第四次答申に基づく大学入試センター試験の廃止検討、秋入学・四学期制など留学経験を増加させる試み、就職時期の後ろ倒し、インターンシップの活発化など、高等学校あるいは留学先・企業との長期的かつ多様なループブリックが描かれる必要性が生じていよう。

そして、学生自身が生涯にわたっての長い学びを継続するためには、自らループブリックを記述し振り返ることができる能力を、在学中に身につけることに力点を置かなくてはならない。本連載では取り上げなかったが、専門教育から卒業研究にかけての時期のゼミナールや研究室教育で、密度の濃い学究の時間を過ごす中で暗黙のうちに達成されていることは、学習者自身が研究のループブリックを日々更新していることに相当する。

大学とは何か

ループブリックが教育のハシゴの格をつなぎ、学校と社会の学びの結び目となるためには、個々の授業デザインを含んだ大学教育全体のグランド・デザインの中に組み込まれる必要がある。建学の理念ミッション、ポリシー・メイキングを通じた組織的教育開発、カリキュラムの体系化と成績基準の明確化、能動学習の導入などの方策には、教育成果をアセスメントするPDCAサイクルを内包した設計に配慮することが望ましい。それら教育情報の収集と分析のために、機関調査(インスティ



教育の梯子モデルとループブリック

筆者は、リメディアール教育への関わりを起点として大学教師の現場に入った。現在は、ファカルティ・ディベロップメント(FD)を支援する教育開発の研究と実践にあたって、学習支援の視点から大学全入時代における小中高大の教育接続に実効的な方策を探る中で、ループブリックに出会うことになった。リメディアール教育における梯子モデル(杉森二〇一一)では、発達段階・学校段階間に存在する段差を、学習到達度のハシゴとして表現する。ただし、最初の何段かが抜けていることに、学生は気付かない状況にある。「懸垂」のような状態でもがいている彼らに、適切なハシゴの格を入れ、学び方(上り方)を共に探し、学生自身が主体的に高みを目指すことを支援するために、様々な教育・学習支援方略とその評価法の探究が必要であ

チューショナル・リサーチ、IRと略される)を実施し、現状に即した方策を立て成果を上げつつある大学もある。

教授伝達・内容中心カリキュラム(教師が何を伝えたか?)から、学習者中心カリキュラム(学生が何を身につけたか?)への価値転換が図られる途上に、私たちは教科・学問を教え伝えることだけが教育の本質ではないことに気づき、教育哲学を振り返らざるを得ない。大学とは何かという問いに立ち返るとき、教師と学生がともに人間形成をなす学習の共同体としての大学をかたちづくるループブリックが描かれていくのではないだろうか。

最後に、本連載にあたって、趣旨に共感し原稿執筆にあたっていただいた諸氏と、連載を提案し継続的に激励いただいた金沢大学・青野透教授、企画段階から一年近く支援いただいた文部科学教育通信編集部の皆様には深く御礼申し上げる。

△参考文献▽

- 清水康敬、中山実、向後千春 編著(二〇一一)『教育工学研究の方法』ミネルヴァ書房、一三六、二二二頁
- 奈良勲(一九七八)「教育学シリーズⅠ 理学療法教育論」理学療法と作業療法、一二巻一号、四三―四七頁
- 沼野一男(一九七八)「教育学シリーズⅦ 教育評価(上)」理学療法と作業療法、一二巻九号、六二九―六三三頁
- 杉森公一(二〇一一)「私立大学におけるリメディアール教育(上)」週刊教育資料、一一一九号、二八一―二九頁